

絵本にひそむセックス・ジェンダー・セクシュアリティ

中川 素子 (文教大学教授)

何年か前のことだが、オムニバス形式の授業「女性学」を受け持ったことがある。私の専門領域は美術造形論や美術史などであり、女性学、ジェンダー論、社会学などについては何の知識もなかったが、学生と一緒に何か考えていくことができればと、この授業を引き受けた。最初にしたことは、授業が始まる前、学生たちが無意識のうちに見せる反応を引き出すための用意であった。それは、建物の入り口から授業を行う教室にいたるまでのあちこちに、女性を規制する言葉「男性専用で女性は使用禁止」などと書かれた紙を貼ることだった。これは私のアイデアでなく、アーティスト・グループのテクノクラートが1994年、東京青山のスパイラルで開催された「人間の条件展—私たちはどこへ向かうのか」で発表した作品「Sex Apartheid」をまねして行ったものだ。もちろん、代表者の飴屋法水の許可をうけており、文字の書かれた紙も何種類かいただいた。スパイラルでは並んだ椅子や公衆電話、またトイレなどに貼りつけられていたが、私も同じように公衆電話やエレベーターの入り口やトイレなどに貼った。

紙を貼る前には、大学の施設課や教務課などの許可をとり、その号棟にある研究室の先生などにも断りを入れた。でも授業が終わった後で、私は事務局からしかられた。そして「先生、来年はこういうこと、絶対にやめてくださいよ」と無愛想な顔で言われた。許可をとったとはいえ、事務局が不機嫌になったのも仕方がない。何故なら突然出現したこの時代錯誤な貼紙に、学生たちの抗議が殺到したというのだ。しゅんとしている私を見て、助手が「先生、抗議をする学生がいる文教大学でよかったですよ。何の反応もないような大学では、それこそ困ります」と慰めてくれた。

これは特別な試みであったが、生きていくためのさまざまな場面で、性別によって受ける扱いの違いを体験することがある。こんな違いは絶対におかしいと思うこともあれば、慣れてしまって何も感じなくなっていたり、気がつかないで見過ごしてしまうことも多い。不当かつ社会的な性差別などの問題を解決していくためには、まず自分自身で感じ、考え、判断することが重要になってくる。そのような思考のきっかけのためには、絵本も一つのキーワードになるように思う。ジェンダー論やセクシュアリティ論などとは全く無関係と思われている絵本だが、考えるためのヒントがたくさんつまっているのだ。

絵本の読者層や年齢層は、昔よりずっと広がっている。それでも絵本を子どものためだけの明るい<聖域>にとどめようとする力はいまだに根強い。たとえ女性であっても、絵本の中にジェンダーなどの視点をみつけようとする動きをいやがる人は多い。といっても表立って反対するのではなく、初めから避けて通るような雰囲気なのだ。特に絵本の中にセクシュアリティをみつけるなどという、きいただけで逃げてしまう人もいる。

けれども、絵本自体はその優しい顔の中に、現実世界の様相を潜ませている。そのため絵本研究の中心にあった児童文学、保育学、美術表現論だけでなく、最近では心理学、社会学、比較人類学、表象学など幅広い学問領域が絵本に目を向けてきている。女性学やジェンダー論の視点から見ても、絵本は興味深い研究素材といえるのだ。

今まで絵本の中に住むことのできた登場人物は、例外はもちろんあるものの、概して以下のようなタ

イプが多い。子どもに愛情をそそぐ優しい母親と力強く頼もしい父親、美しいお姫様と凛々しい王子さま、可愛い女の子と腕白な男の子なのである。これは人間だけでなく、擬人化されている動物とでも同じことだ。社会的文化的に理想とされている性のステレオタイプが絵本の中に闊歩している。子どもから大人まで大多数の読者が、それには何の疑問も呈することがないので、このステレオタイプな価値観は、世の中に蔓延していくことになる。

しかし、ここ何年かの間に、従来とは違った性のありようを絵本の中にも少なからず見つけることができるようになった。21世紀になったこの時点で、ジェンダーやセクシュリティに焦点をあてて絵本を語ることは、面白いだけでなく、時代を開示できるのではないだろうか。それに絵本は大量出版され、割合安価なので、誰でも容易く手にいれ見ることができる。そのため専門の研究者の考えを読んだりするだけでなく、読者の一人一人が自分独自の発見をし、新しい論をうちたてることのできるのではないだろうか。

立教ジェンダーセッションでお話することになったのは、「女と絵本と男」(中川素子編 翰林書房)(**図1**)の出版から間もない頃であった。この本は日本女子大学大学院で行った私の特別授業「絵本とジェンダー」をきっかけにして受講生たちと作った共著である。授業は私の一方的な講義でなく、それぞれが無意識にもっているジェンダー意識を洗い出して自分で認識すること、絵本にひそむセックス、ジェンダー、セクシュアリティを見つけ出すこと、そして最終的に自分のジェンダー論を絵本論としてまとめることであった。従来のジェンダー観を打ち破りたいと考えている院生もいれば、反対に女らしさ、男らしさは必要と考えている院生もいた。それらを素直に出してもらうことを、目標にした。なかなかよい本ができたと思う。



図1

授業で最初に行ったのは、手のひらを開け閉めしながら話をする＜てのひら絵本＞である。主題は、ある家族(夫、妻、小学生一人、乳児一人)の朝の風景にした。20分という短い時間で考えたため、性の在りように対する刷り込まれた感覚が出てしまったのかもしれないが、院生の多くが夫に結びつけたのは新聞とコーヒーであり、妻に結びつけたのは家事と赤ん坊の世話であった。若い院生たちであっても、従来のジェンダー観に染まっているのだと改めて確認した。

この本は、私と院生のみでなく、ジェンダーを語るにふさわしい執筆者数人にもお願いした。落合恵子さんは、パウエルズ書店の書棚がフェミニズムからエイジズムの本に微妙に入れ替わっているのを見た時の思いや、子ども時代に人種差別、性差別、年齢差別、「健常者」中心主義など4つの鎖から解放されることの素晴らしさ、またジェンダー・フリーなどという言葉が不要になることを夢見るだけでなく、まずは実践と、子どもの本の書店クレヨンハウスと女性の本の書店ミズ・クレヨンハウスを続けていることを書いている。

村中李衣さんは、「キツネ」(マーガレット・ワイルド文、ロン・ブルックス絵、寺岡襄訳、BL出版)の翻訳の言葉が、「友情や誠実さや、裏切りの危険性についてのドラマ」から「二人のタイプの違う男の間で女性の心の揺れが引き起こす愛憎ドラマ」に変えていることを、読者の読みと関係づけながら引き出している。そして読者は、セクシュアリティや人生観を登場人物に仮託するだけでなく、自分の内

側に取り込み、自分自身と対話を始める契機となりうると指摘している。

刈谷雅さんは、「Oの物語」(R・M・カンター作、三井マリ子訳、レターボックス社)で多数派Xの中で生きる少数派Oの苦しみについて書いている。時にXは「あなたの好きなように生きればいい」と言うが、それは刈谷さんも含め性同一性障害者である人にとって表面的な優しさでしかなく、現実社会の中で生きていくためには、女か男かを選びとらなければならない。刈谷さんはジェンダー論では否定されやすい女らしさと男らしさという性の在りようの区別があったからこそ、自分はその区別を立脚点としてやってこれたという。そういう心の思いがあることも、私たちは知らなければならない。

院生たちもがんばってくれた。たとえば森井佳代さんは「シンデレラ」(シャルル・ペロー原作、ロベルト・インノチェンティ絵、谷本誠剛訳、西村書店)に描かれた絵などから、シンデレラ・コンプレックスという依存的体質をジェンダー論的に単純に批判するのではなく、他者の視線にさらされながらも自己の満足に主軸を置く女性の本質をおもしろく解釈している。王子は不在だというのだ。そういえば、王子についての記述には具体的なイメージが欠けている。

「女と絵本と男」は結論を出した本ではないので、皆さんのそれぞれ視点を入れこみながら、ぜひ読んでいただければと思う。

第47回立教大学ジェンダーセッションでは少し欲張りすぎた感もあるが、この「女と絵本と男」でとりあげた絵本を中心に、135枚の画像をおみせした。絵本そのものをたくさんもっていくことができないので、少しでも絵を見ていただければと思ってのことである。それらの画像を大きく三つに分け、以下のテーマで話をした。一つ目は家族の中での母親と父親のイメージとその役割分担について、二つ目は女の子と男の子、女性と男性の表現のイメージ、三つ目は生物学的性差であるセックスやセクシュアリティの表現についてである。

1、家族の中での母親と父親のイメージとその役割分担

絵本は小さな子どもを対象にしているためか、子どもが生きていくための基本的な単位としての家族がよくとりあげられている。そういった中で子どもに限りない愛情を与える優しいお母さんはたくさんいる。子どもを抱きしめ、微笑み、手をつなぎ、どんな時でも子どもの側にいる。それほど母親は子どもと結びつけられているが、それだけではない。絵本の中には家庭を守り、よく働く完全無欠なおかあさんの何て多いこと！

でも子育てや家事につかれはてている女性も描かれるようになった。たとえば「しーっ！ぼうやがおひるねしているの」(ミンフォン・ホ文、ホリー・ミード絵、安井清子訳、偕成社)では、ねている子どもを起こさないように蚊や猿や象などに静かにしてと頼んでまわり、疲れ果てた母親がウトウトとねてしまう。その側のハンモックの中では、子どもがぱっちり、いたずらそうな眼をあけている。「ああいそがしいいそがしい！」(ジョナサン・シップトン文、マイケル・フォアマン絵、せなあいこ訳、評論社)では、あまりの忙しさに何もかもうまく事が運ばないので母親は涙を流してしまう。涙を流すのは、子どもでなく母親になったのだが、涙を流す人を愛情でつつみこむのも、母親でなく小さな男の子になっている。私も子育てや家事がうまくいかない時には、情けなくて泣きたい感じだった。こんな絵本があったならどれほど心が解き放たれたことだろう。この2冊については拙著「絵本は小さな美術館」(平凡社新書)の第4章「絵本が語る現代」にそれほど長くはないが書いているので、興味のある方は読んでいただければと思う。

母親業や主婦業に疲れ果てた女性が涙を流すだけでなく、そんな状況から抜け出し自分自身を変えようと一歩踏み出す絵本も現れている。「おんぶはこりごり」（アンソニー・ブラウン作・絵、藤本朝巳訳、平凡社）だ。表紙には夫と二人の息子をおんぶしている女性の姿が描かれている（図2）。三人も背負ったのでは女性はバランスをくずして倒れること間違いなしだ。作者は男性だが、この絵本は女性の多くが抱えている疲れと悲しみと苛立ちをユーモアたっぷりに表現していて、多くの女性たちから喝采をあびているようである。

話はこうだ。母親が家事で忙しいのに夫も二人の息子もまったくそのことに気づいていない。手伝わないどころか、大声で食事の催促をし、片付けもしない。母親が働き続けている間中、彼等はそのうのうとテレビを見ている。忍耐強い女性にも我慢の

限度があったのだろう、ある日、母親は「ぶたさんたちのおせわはもうこりごり」という置き手紙をして出ていってしまう。作者のアンソニー・ブラウンはよく名画を引用する絵本作家だが、この絵本の中でも暖炉の上に飾ってある絵は、イギリス18世紀の画家トマス・ゲインズバラの有名な肖像画「アンドリュース夫妻」である。でもこの「アンドリュース夫妻」の若い妻の姿は、輪郭線で切り抜かれ、絵の中には見えない。夫人が消えていなくなった絵は、妻が出ていってしまったこの絵本の家族を象徴しているのだ。あれれ！置き手紙をとりあげた夫の手は、人間でなく豚の手だ。怠惰をむさぼり、「ぶたさんたち」と書かれた男性たちは、本当に豚になってしまったのだろうか。それは絵本をご覧くださいのお楽しみ。

この絵本に描かれた家事を女性におしつけている夫と男の子二人は、今までの男性イメージを踏襲しているといえるが、それと反対に最近絵本の中で家事も育児もする父親がふえてきている。「ママがおうちにかえってくる！」（ケイト・バンクス作、トメク・ボガツキ絵、木坂涼訳、講談社）のお父さんや「ライオンのよいいちにち」（あべ弘土作・絵 佼成出版社）のオスライオンなどは、外で働いている妻に代わって、家事と育児を立派にこなしている。ところで育児休暇をとる男性は、2009年8月の集計では、女性の90.6%に対し男性は1.23%であった。この大きな差により、現実社会の中で厳しく男性をしぼっている性別イメージの存在を再確認させられたが、こんな絵本を子どもの時に見て育ったなら、育児休暇をとることにためらいを感じない男性が増えるかもしれない。また「どっちがへん？」（岩井俊雄作 紀伊国屋書店）のように、実際に作者が子育てに関わる中で、子どものアイデアも取り入れて生まれた絵本もある。

役割分担としてでなく、せざるをえない父子家庭の父親を描いた絵本もいくつか出ている。一人で家事や育児をがんばっている男性は、女性と同じように疲れ果てている。たとえば「パパと10人のこども」（ベネディクト・ゲッティエール作・絵、那須田淳訳、ひくまの出版）のおとうさんは、10人の子どもの世話で眼の下に隈ができていて、「おやすみアルフォンス！」（グニツラ・ベリイストロム作・絵 やまのうちきよこ訳 偕成社）のおとうさんは、眠れない息子のわがままをあれこれきいている内に、自分の方が床の上で寝てしまう。でも父親たちの子どもに寄せる愛情は母親とかわりはない。ところで皆さんは、日本では行政が母子家庭に援助するのに比べ、父子家庭を援助する自治体がほとんどないということをご存知だろうか。社会的に作られた性差イメージに苦しんでいるのは、女性側だけでない



図2

く、男性たちも同じなのだ。

2、女の子と男の子、女性と男性の表現のイメージ

絵本では「デイビッドがっこうへいく」(デイビッド・シャノン作・絵、小川仁央訳、評論社)や「エドワードせかいでいちばんおぞましいおとこのこ」(ジョン・バーニンガム作・絵、千葉茂樹訳、ほるぷ出版)の主人公のように、活発でいたずらで困った子はたいてい男の子。「だーれもいないだーれもいない」(片山健作・絵、福音館書店)の主人公のように、たよりなげで泣き虫だったりする子や、優しかったりきれい好きだったりする子は、たいてい女の子と相場は決まっていた。

ジェンダー論などでまずとりあげられる絵本は、そういった固定的な女の子の在り方を真逆にし、強い女を描いた絵本だ。「せかい一大きな女の子のものがたり」(アン・アイザックス文、ポール・O・ゼリンスキー絵、落合恵子訳、富山房)の女の子は、大人の男性が誰ひとりとしてやつつけられなかった大きな熊を退治し、「パイルドライバー」(長谷川集平作・絵、ブッキング)の女の子はプロレスの技で男の子をやつつけてしまう。また「モンゴルの黒い髪」(バーサンスレン・ボロルマー作・絵、長野ヒデ子訳、石風社)では、女性たちが長い髪の毛を大きな鳥の翼のように結び、国に攻め入った邪悪なカラスを脅かして追い払う。

強く力持ちな男性を真逆にしたやさしい男の子も出現している。性別による作られたイメージを声高でなく心地よく自然に崩してみせているのが、子犬の男の子を描いた「アストンの石」(ロッタ・ゲッフェンブロード文・絵、菱木晃子訳、小峰書店)である。アストンは寒い冬、水たまりに石があると、寒くてかわいそうと家まで持って帰り、いや、つれて帰ってくる。そしてあたたかいお風呂に入れてあげ、ベッドにねかせてお布団をかけてあげる。次から次へとひろってくる石で、いつしか家の中は石だらけだ。小さく弱いものを慈しもうといっしょうけんめいなアストンの愛情は、女の子も男の子も変わりはないと教えてくれる。

肉体的に強いだけでなく、独立心をもち精神的に強い女性も絵本の中で魅力的な光を放ちだした。女性には許されなかったガラス吹き職人になるために女の子がした冒険を描いた「エレナのセレナーデ」(キャンベル・ギースリン文、アナ・ファン絵、小島希里訳、BL出版)や月に男性がすんでいるという言い伝えを本当かどうか確かめに行く女の子を描いた「お月さまをめざして」(ゲルダ・ワグナー文、リロ・フロム絵、佐々木田鶴子訳、ほるぷ出版)などだ。これらの絵本は、特にフェミニズムの運動と連動しているわけではなさそうだが、まったく影響がないともいえないだろう。

絵本の中でのみ結晶化される夢でなく、現実に実行された夢や闘いを描いた絵本もある。「化石をみつけた少女—メアリー・アニング物語」(キャサリン・ブライトン作、せなあいこ訳、評論社)では、まだ12歳の女の子が、大きな化石をみつけ掘り出し、「ローザ」(ニッキ・ジョヴァンニ文、ブライアン・コリアー絵、さくまゆみこ訳、光村教育図書)では、自由の国といわれているアメリカで、バスの座席を白人に譲らなければならないことになっていた黒人女性ローザが座り続けたことにより、平等な権利を勝ちとっていく。彼女の逮捕にもかかわらず、ローザの意志表示は、共鳴する女性たちの運動となり、黒人たちの間に大きな波動となって、人種差別を突き崩すことになるのだ。

3、生物学的性差であるセックスやセクシュアリティの表現

社会的文化的に作られた性差のありように基づくのではなく、生物学的な性別(セックス)や性愛などをみていく。「おんなのこってなあに?おとこのこってなあに?」(ステファニー・ワックスマン作・絵、

山本直英訳、福音館書店)は、生物学的な性別により私たちが植え付けられているイメージの反対をみせていく写真絵本だ。たとえば泣かないで強いとなっている男の子が涙を流している姿などだ。性のイメージに疑問を投げかけている絵本だが、性同一性障害の方からは、性器の違いで男女を区別するのはおかしいとの指摘もあった。

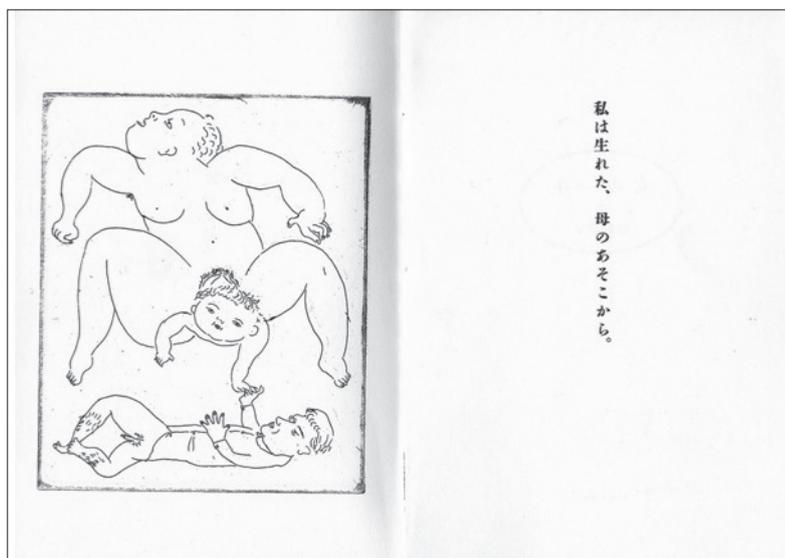
同性愛者同士で家庭をもっている絵本はオランダなどにあるが、日本のこと、当分は翻訳されないに違いない。ただ、「タンタンタンゴはパパふたり」(ジャスティン・リチャードソン&ピーター・パーネル文、ヘンリー・コール絵、尾木かな子・前田和男訳、ポット出版)は、オス同士で卵を孵化させたペンギンを描いている。仲がよくいつも一緒にいる二羽のオス同士のペンギンに、親が抱こうとしない卵を飼育員が与えたらと、二羽で順番に抱き孵化させたという実話に基づいている。同性同士の愛が偏見なくみられるようになる絵本だ。

「レナレナ」(ハリエット・ヴァン・レーク作・絵、野坂悦子訳、リプロポート)では、少女が乳首にガムをつけたり、トイレで笛をふいたりしている。少女二人が真っ裸でねそべり、相手の腿に木の棒をさしこんだりもしているが、身体的な遊びやふれあいは、まだまだ幼い子どものものだ。

男の子の春のめざめを描いた「トリゴラス」(長谷川集平作、文研出版)は、風のうなりに男の子が妄想をふくらます。翼をもった怪獣トリゴラスが、男の子が好きなかおるちゃんを狙いさらっていく。女の子は少年と同じくらいの年齢のはずだが、トリゴラスの手でつかまえている姿は、胸が大きく髪の毛をたらししたセクシーな大人の女性だ。怪獣が女性の寝室の窓から覗き込むアメリカ映画の1シーンが裏表紙に描かれているが、裏表紙全体にでなく小さくおさめられているのは、出版社の意向のようだ。

「あかずきん」(樋口淳・文、片山健・絵、ほるぷ出版)で狼の大きな口の中に赤ずきんの頭が入っている場面は、男性に襲われる女性のようにみえるが、サラ・ムーン写真による「赤ずきん」(シャルル・ペロー原作、サラ・ムーン写真、定松正訳、西村書店)では、実際に狼はジーンズをはいた人間の男性として表現されている。狼は車にのって女の子を待ち伏せ、最後の頁はベッドの上のしわくちゃになったシーツである。サラ・ムーンのモノクロの写真は光と影の表現が美しく、品位さえ感じるが、その場面が何を意味するかは一目瞭然だ。

子どもであっても感じる性的なイメージは、日本の絵本界では言葉には出さないまでも禁止事項と受け取られている。けれども上記のように身体的な様相やセクシュアリティを表現する絵本も出てきては



私は生れた、母のあそこから。

いる。ただ、現代美術などと違い、女性の股間部などの身体部分が表現されることはない。たとえ、妊娠や出産というテーマであっても、女性の身体部分は隠される。歴史的にも女性の身体部分が穢れていると考えられていたことは拙著「モナ・リザは妊娠中? 出産の美術誌」(平凡社新書)にも書いたので、読んでいただきたい。この穢れ概念は、作られたものかもしれないが、無意識のうちに女性たちもこの穢れのイメージから解き放たれていない。ジェンダー論を説く女性

図3

であっても、その傾向が見られることもある。

そんな意識をふっとばすかのようにセックスや性器を隠す事なく描いている絵本が、「女の一生1」(佐野洋子、トムズボックス)である。しかも1992年という早さだ。戦時下でも夫とセックスを繰り返し、7人の子どもを生むが3人を亡くし、次第に娘(作者である佐野洋子)に暴力をふるうようになる裸体の母親を描いている。最初の画面は、陰毛に取り囲まれた大陰唇が大きく開き、そこから赤ん坊が出てくる場面である。その画面の下辺には、ズボンをはかずにペニスと臍毛をみせている父親がいる。性器をはっきり描きながら、のびやかな線が美しいエッチングの絵だ。(図3)

絵本は、世の中のイメージを再認識させるだけでなく、人間のあり方や人間関係の新しいイメージを作り上げ、世の中に広めもする。たとえば「Separate Ways 君のいる場所」(ジミー<幾米>作・絵、宝迫典子訳、小学館)は、なかなか会えない恋人同士を描いたやや甘ったるい絵本だが、若い二人、男性と女性とは同じ力、つまり対位法で描かれている。この絵本の構造自体が男性と女性の平等な関係を表しているのだ。言葉による概念のみでなく、絵による表現は無意識のうちに心の中に浸透していくものとなる。

この文にとりあげた絵本は、ほんの一部である。ジェンダーやセクシュアリティを考えるきっかけになる絵本はまだたくさんある。皆さん自身でみつけていただければと思う。絵本のジェンダー論などというと、女の子をものすごく強く描いたものなどに眼がいつてもいってしまうことが多いが、私は「西山風土記・春 あまがえるとどこさいった」(梶山俊夫作、富山房)や「わが西山風土記・秋 こんこんさまよめいりいつじゃ」(梶山俊夫作、富山房)などのように、男の子と同じ場で自然に遊んでいるような女の子に惹かれる。ジェンダー論でとりあげたなどというと、きっと作者がびっくりするに違いない。でもそんな絵本にすばらしい人間関係をみつけたたりできるのは、うれしいことである。

立教ジェンダーセッションは活発な活動をしているようだ。私の講演にも若い学生たちがたくさん集まってくれた。また通常、絵本の集まりにはお見かけすることの少ない男性もかなりいらして下さった。学生たちが素直にユニークな質問をするなど会の様子から、立教大学の取り組みの継続的なすばらしさを感じたものである。

最後に現在私が勤めている絵本学会会長として宣伝させていただきたい。この会は絵本研究者でなくても、どんな領域の研究者でも、単に絵本が好きという人でも入会できる会です。

絵本に興味のある方は、どうぞ絵本学会に入会してください。

入会申し込みは

〒567-8578 茨木市宿久庄2-19-5 梅花女子大学 香曾我部秀幸研究室内絵本学会事務局
をお願いします。